

立場が変われば

株式会社 新星工業社
宇部サービスセンター

森 重 朋 洋

私はある地方の病院に常駐し電子カルテシステムの運用業務支援を担当している。大きな病院ということもあり、対応する機器の台数が多いのは勿論のこと、その種類も多様である。

この病院へ来た頃には、運用というその「何でも屋」のような守備範囲の広さに困惑することもあったが、逆にそのことが刺激となり、様々な知識を得たり経験を積むことが楽しく感じられる様にさえなっていた。何より現場でトラブルを解決したときに「ありがとう！助かったよ」など、声をかけて頂いた時などはやはり気分が良いものだ。

しかし、そんな気分の良い日ばかりではない。日常的なトラブルは、ほぼパターン化され流れ作業的にこなしていく感じだ。それは故障と言うより、「パソコンが立ち上がらない」といえば、電源コンセントが抜けている。「印刷物が出てこない」といえば、ただの紙詰まりといった具合に、正直もう少し確認して欲しいと思うトラブルも多い。

そういった些細なトラブルを対応しても、私も拍子抜けだし現場の方も「あらそう？」程度の反応だ。不謹慎ではあるが、たまには難易度の高いトラブルが発生し、それを解決することで自分の力を試したいとか、存在意義を確認したいと思うこともあった。

そんなくだらないことを考えていたから罰が当たったのだろうか？

ある日の事、仕事を終え家に帰り風呂上がりにビールを一口飲んだらどうか？そこまでの記憶はあるが、それ以降の記憶が無い。気が付くと私は床に倒れている。「え？飲み過ぎたか？」と起き上がろうとするが体に力が入らない。その後の過程は色々あるが、なんと私は自分の常駐している病院へと運ばれた。

救急の初療室へと運ばれて様々な検査をする。私にとっては見慣れた場所だし顔見知りの先生や看護師さんも居られる。だからだろうか全く不安は無い。それどころかいつも自分が見ているシステムの動きを観察する余裕すらある。「なるほど、こうやって電子カルテから検査や処方オーダーをすれば処方箋が印刷されたり、ラベルが発行されるんだな」など予想通り動きをするシステムに一人で感心しきりだ。

MRI検査の結果私は、脳梗塞を罹患していることが判明した。「直ぐに血栓を溶かす点滴を投与します。」そう説明を受ける。脳梗塞は発症からの時間が勝負で、4時間以内にこの薬を投与すればその後の回復や後遺症に劇的な差があるみたいだ。私は点滴を投与されながら救急病棟へと移された。

病室のベッドの上で様々なことを考えていた。幸い私は軽度であるらしく、今は何ともない。

患者としてここに居ることが申し訳なく思

えてくるほどである。周りには重症の患者さんも居られ、先生や看護師さんも忙しそうである。忙しいという表現より、命というものに携わっている緊張感というのだろうか。医療現場というのは想像以上に痺れる世界だというのがひしひしとを感じる。

私は毎日ここへ常駐しているにも関わらずいったい何を見ていたんだろうか。

私が先ほど受けた治療の場面を考えても、あの1分1秒を争う時にパソコンの電源が入らない、処方箋が印刷出来ない、そんな想像をするだけで恐ろしい。原因はどうあれ電子カルテが使えない、印刷が出来ないと言うことは、それを利用している人にとっては、システムがダウンしているのと結果同じであるし、ましてや一番迷惑を被るのは治療を受けているあのときの私である。

些細なトラブルだ、拍子抜けだとか思っていた自分を今となっては恥ずかしく思う。

静かに落ちていく点滴を見つめながらそんなことを考えていた。

二週間の入院生活であったがその間は、シ

ステム利用者や患者という立場でシステムを見ることが出来た。それは運用をしている時とは全く違うシステムに見えたのは、気のせいでは無いだろう。システムを安定稼働させるということは何も高度な技術力だけではない。

電源が抜け易いのであれば、タップの位置や配線を変えるなど、やることはまだまだある。そんなことくらいでと思うだろうが、そういった小さな積み重ねや心遣いが、利用する側の立場になれば、安定して稼働するシステムという印象になるのだろう。

幸い私は何の後遺症もなく退院でき、今もまたこの病院でシステム運用している。

退院する際に先生に言われた言葉を心に留めて。

「いつもくだらない事で呼びつけてごめんね。でもね、ものすごく頼りにしてるし、あなたが居るから此方の仕事ができるんだよ。これからもよろしくね。」

その言葉、もう少し早く言ってくれなかったですか。とは口が裂けても言えなかった。